

## ◎中学生の部

### その他の良い作品

#### 夏の音

南中学校 一年

荒井 天翔

「ピー、そーれ！ピー、そーれ！」  
「セイヤ！セイヤ！」  
みこしを担いだ人たちの力強い声と  
合図の笛が 年に一度  
プラザの通りに鳴り響く  
夏祭り一週間くらい前から  
友達やまわりの人  
先生たちまでもその話題に浸っている  
僕は中学校に入ってからできた  
友達といくことになった  
人混みは好きじゃないけれど  
こういうのは嫌いじゃない

むしろ好きな方だ  
今年も雲行きが怪しい中  
開催されたけれど  
あたり一面人の頭でうめつくされていた  
そうして僕たちは人混みに入っていた  
僕はいつも決めていることがある  
それは最初に必ずかき氷を食べることだ  
何でかは自分でもよく分からない  
けれどそんな冷たいかき氷は  
あつくなつた僕の体を冷やしてくれる  
そんな気がする  
そんな風に友達と楽しくでいると  
いよいよ主役の登場だ  
笛の音とかけ声が どんどん  
近づくのが分かった  
みこしを担いでいる人は満面の笑みを  
見せてくれる それはまるでパワーをくれた  
夏祭りはこれがあるから来年も来たくなる  
「ピー、そーれ！ピー、そーれ！」  
「セイヤ！セイヤ！」  
みこしを担いだ人たちの力強い声と  
合図の笛が 今年もまた

プラザの通りに鳴り響く

## 後悔しないために

東中学校 二年

奥泉 直大

火のついたロウソクに綺麗な装飾  
チーンおりんが鳴り静かになる  
今日はお盆の日だ  
ご先祖様が帰ってきた  
日頃見守ってくれている感謝をする  
手を合わせる  
声には出していないけど心の中で会話する  
伝えたいことを沢山伝える  
たくさんのご先祖様の中でも一番伝えたい  
人はばあちゃんだ  
過ごした時間も長くたくさんの思い出がある  
僕が小さい時  
よくばあちゃんの家泊まりに行ったり  
卓球をしたりフルーツポンチを作ったり  
沢山のことをした  
楽しい思い出が沢山ある  
でも一つだけ悔しい思い出がある

ケンカをしてしまつて全然会いにいかなくなつた時がある  
日が経ち自分でも流石に会いに行こうと思  
い家に行った  
するとばあちゃんが僕に謝つた  
僕も謝り仲直りをした  
でも一年もしない間にばあちゃんはいなくなつてしまつた  
そこですごく後悔をした  
なぜ意地を張つて家に行かなかつたのか  
自分が先に謝らなかつたのか  
もっと楽しいことが出来たんじゃないのか  
直接伝えたいことも沢山あつた  
だから僕は今沢山ばあちゃんに伝えたい  
そしてこんな後悔を二度としないために  
自分の行動や発言に責任を持ち  
仲良く人と関わるようにしている  
さらに一日一日を「今」を大切に  
生きていこうと思う

# おばあちゃんのまほう

東中学校 二年

小澤 うた

「チョキ チョキ」 「スー スー スー」  
おばあちゃんの家に行くとき聞こえる  
私がおかつかつてとてという優しい声で  
「いいよ」  
きれいに整えられたさいほう箱を取りだす  
その箱の中には  
いろとりどりの糸  
たくさんの針  
かがやくはさみ  
いろいろな形のボタン  
私はそれを見るとワクワクする  
「チョキ チョキ」 「スー スー」  
まるで布にまほうがかかったようだ  
おばあちゃんは  
「できたよー」  
と言つて笑顔でわたししてくれる  
私はうれしくなるまほうにもかかる  
おばあちゃんはまほうが使えるかもしれない

私は少し大きくなった  
教えてもらえようになつた  
一緒につくれるようになった  
「チョキ チョキ」 「スー スー」  
いつも見ていた景色とはひと味違う  
さいほう箱がもつとかがやいて見えた  
「チョキ チョキ」 「スー スー」  
完成した  
でも、何か違う  
糸はがたがた  
玉どめはぐちやぐちや  
やつぱりおばあちゃんはまほうが使える  
それから練習した  
少しまほうが使えるようになった気がする  
「チョキ チョキ」 「スー スー」  
しかし、おばあちゃんのまほうと違う  
やつぱりこのまほうはおばあちゃんにしか使  
えない

## 入部までの想い

東中学校 一年

木村 瑠菜

今でもせんめいに覚えている  
迫力いっぱいだった  
あの曲を  
「私も最高の音楽を奏でたい」  
「心に響く曲を創りたい」  
そう感じたあの日  
楽しみにしていた  
仮入部へ行った  
「トウトウトウー」  
「ポップーポ」  
「タツタカタツタ」  
初めて見る楽器が  
たくさんあった  
ますます  
興味がわいてきた  
先輩に教えてもらった  
音の出し方  
楽器の持ち方  
たくさんの事を学んだ

初めて吹けた時の嬉しさ  
音が鳴らない時の悔しさ  
それでも  
私をあきらめない  
だって  
憧れの先輩が目の前にいるから  
先輩のようになるんだ  
絶対吹けるようになるんだ  
練習をつみ重ねて  
必ず  
「最高の音楽を奏でる」  
「心に響く曲を創る」  
この夢を叶えるんだ  
そう強く思った日  
私は心から決めた  
この部に入ろうと

## 終電の中で

東中学校 一年

小久保 晴希

そこは  
僕はやっぱりいつもの風景だ  
羽生の変わらぬその風景が好きだ  
その風景が

深夜に走る 電車の中で  
今日のことを 思い出す  
雨に降られて 電車が止まり  
今は終電に 乗っている

空気を運ぶ 電車の中で

母に送った メッセージ 伝言を見る

一向につかない既読を見て

苛立ちを覚えながら

現在時刻を見て 自分で勝手に 納得する  
田畑が見えてくると そこは故郷の羽生

いつもの景色を見ながら家に帰ると

いきなり親に 抱きしめられ

そこに羽生の 温もりを感じる

翌日 起きて 外を見ると

## 繋ぐ

南中学校 二年

佐藤 瑛太

バレーボールはボールを繋ぐスポーツ  
拾って 繋いで アタック  
たった三つのステップ  
それがなかなか難しく それが面白い  
中学に入って初めて取り組んだ  
そして どんどのめり込んだ  
基礎練習やボール拾いばかりだった一年の初  
め  
三年生の先輩がバシッと決めるアタックにし  
びれ 憧れた  
センターのポジションに入ることになった初  
めの試合  
ポジションの取り方も守り方も 緊張で混乱  
そのとき  
「利き手を相手の利き手にそろえるといい」  
先輩の言葉で体が動く  
ほんの少し納得のいくプレーができた

今年の春 初めての後輩が入部  
先輩に教わったアドバイスを一つ一つ伝えて  
いく番  
自分ができるようになることも嬉しいが  
後輩たちが少しずつ上達する姿を見ることも  
嬉しいということ 初めて知った  
今年の夏 ずっと一緒にプレーしてきた先輩  
と一緒に出場した最後の試合  
全力でプレーをする先輩の姿  
得点が決まって一緒に味わう喜び  
うまく繋がらなくて感じる悔しい思い  
今までで一番熱い試合だった  
いよいよぼくらの代がきた  
先輩たちがずっと繋いできた僕たちのバレー  
先輩たちが目標にしていた場所への出場  
先輩たちの思いも繋ぎ  
僕たちのバレーを作りたい

## 書の道

南中学校 三年

澤田 俊輝

年長の夏 書道を始めた  
早いもので十年目 私は中学三年生  
はじめは鉛筆  
線の練習 縦線 横線 ぐるぐる線  
薄くて 細くて ひよろひよろ  
毎日毎日繰り返し  
一年生、なんとかひらがな形になった  
やっと筆に挑戦だ  
硯に水さし 固形墨  
百回磨る 水が墨へとゆっくり変化  
筆に墨を含ませ さあ挑戦  
縦線 横線 まんまる線  
楽しい時間はあつという間  
気づけばお迎え また来週  
三年生 初めて書き初め挑戦だ  
ピカピカの書き初めセット嬉しいな  
下敷き 文鎮 筆 硯  
墨を含ませ さあ挑戦  
全然上手く書けないぞ

止め跳ね払いでできないぞ  
線はベタベタかすれちゃう  
毎日毎日練習だ  
爪は真っ黒 肘 膝 墨のスタンプだ  
四年 五年 六年  
毎年書き初め練習頑張った  
力はしつかりついてるぞ  
中学生 今度は行書に挑戦だ  
文字のつながり意識して  
文字 線の研究面白い  
日々練習積み重ね  
表現する楽しさと  
書道の魅力に取り憑かれ  
中学最後の書き初めに  
今年も挑戦 楽しみだ  
これから先も 書の道を歩んでいきたい  
書道パフォーマンスしてみたい  
先生 ご指導下さりありがとう  
両親よ 習わせてくれてありがとう

# 僕の熱い夏

南中学校 三年

関根 伶

中学三年  
部活も引退し受験生の熱い夏が始まる  
はずだった  
9時になったら勉強を始めよう  
9時半になったら  
机の上と この棚を片付けたら  
いつか読んだダメなマンガの主人公の様な  
ダメダメさ  
勉強一色の熱い夏との戦いのはずが  
意志の弱い最弱な自分との 意味のない  
最低な戦いになっている  
いや 戦ってもいない  
僕の完全敗北  
いつも僕の前に立ち塞がる  
楽な方へと向かってしまおう  
僕の中に住む弱いな意志の自分  
もう少し頑張れば良かった  
もっと頑張れたはず  
いつも終わった後にする同じ後悔

僕の中に住む 弱い意志を持つ僕との決別  
ダメなマンガの主人公の自分とは  
ここでさよならをしよう  
弱い自分自身との戦いをここに終え  
強い意志を持つ僕の中の自分と  
共に手を取り  
思いを形に変えていこう  
夏休みは始まったばかり  
目指す未来を手にするために  
ここから僕の熱い夏が始まる

## 節目

南中学校 三年

富田 渚月

「勝負あり。」  
白に旗が上がった。  
おわってしまった。  
私の夏が。最後の公式戦が。  
「お疲れ様。」  
そう言われた。  
小六の夏から始めた剣道。  
一生懸命稽古してできた、  
手のまめ。硬くなった足の裏の皮。  
たくさん努力したはずなのに。  
悔しかった。部活を引退するのが悲しかった。  
地区大会で仲良くなつたみんなと、もう会え  
なくなるのが、とても寂しかった。  
悔しい、悲しい、寂しい。  
なのに、涙は出てこない。  
先輩に  
「やり切ったね。」  
そう言ってもらえた。少し、すつきりした。  
残りの短い時間を、友達との思い出作りに費

やした。  
一緒にご飯をたべて、たくさん話した。  
写真もとった。  
「帰るよ。」  
お母さんが言った。  
ああ、もう時間だ。  
三年間、剣を交え続けた友に別れを告げ、会  
場を後にした。  
帰り道、空は明るく、太陽は輝いていた。  
まるで、私の心に、希望の光を差しこんでい  
るかのよう。

「ありがとう」と。

東中学校 三年

長嶋 月雫

私はこれからも魔法の言葉を使って周りの人を笑顔にしたい。何気なく過ごせた今日に「ありがとう」

いつからだろう。ふと気がつくとき、家族に感謝を伝えられなくなっていた。

私が成長したからだろうか？

それとも恥ずかしいからだろうか？

毎朝、母が水筒を用意してくれる。

言おう。「ありがとう」と。

言ってみる。そうすると、「いいえ。学校頑

張ってね」

そう言ってくれた。私は感動した。

母も忙しいのに私を応援してくれている。

言おう。「ありがとう」と。

感謝は、相手も自分もうれしくなれるもの

一つだ。だから

言おう。「ありがとう」と。

家族に「ありがとう」と。

友達に「ありがとう」と。

この私が住んでいる羽生に「ありがとう」と。

自然に「ありがとう」と。

「ありがとう」は魔法の言葉だ。

## 自転車通学

南中学校 一年

平岡 桜充

自転車のメンテナンス係はおじいちゃん  
タイヤの空気はいつも完ぺき  
ある日の部活帰り後ろを振り返ると  
黒い雲がせまっていた  
僕はギアを上げ家へと急いだ

学校へは自転車通学をしている  
入学前は少し不安だった  
自転車は乗れたけど  
子ども用の自転車  
大きい自転車は乗ったことがなかった  
いざ乗ってみたら  
はじめはハンドルがグラグラ  
真つすぐ進めなかった  
姉や母と通学路を何度か通り練習した  
ここは必ず止まる  
信号をよく見る  
普段車で通る道も自転車だと違う景色に  
見えた

はじめは緊張した通学路も今は慣れ  
田んぼの稲を揺らす風の心地良さ  
おそば屋さんの近くを通るとき  
あの良い香りを  
楽しみながら通っている

## 剣道部の音と「藍」

南中学校 一年

松澤 瑠泉

道着を着るとやる気がいっきに入り、姿勢もよくなる。  
真剣に稽古にのぞんでいる声。  
体育館にひびくふみこみの音。  
足にみんなの真剣さが伝わってくる。  
竹刀がぶつかる音。  
面をつける時の「パンパン」という音と共に  
気合いが入る。  
面を打たれた時の「スパアーン」という気持ちの  
良い音と一緒に頭がクラクラしたりもする。  
小手を打たれた時には「ジンジン」するあざ  
ができる。  
胴を打たれた時にも「パアーン」と音がひび  
き、同時にお腹も痛くなる。  
面をつけると滝のように汗が出る。  
面を取った後、目に入りそうだがまんしていた  
汗を手ぬぐいでふくのがとっても気持ちがいい。

小手をはずすと手の甲に打たれた時のあざと「藍」がついている。  
胴ひもとると両手いっぱいうすく「藍」がつく。  
たれをはずすとしばらくいたのがなくなり開放感があつてがんばりを感じる。  
剣道部には音と「藍」であふれている。